

平成10年度

一人ひとりを大切にする教育相談

— カウンセリングのころとは —

学級担任が行う教育相談

川崎市総合教育センター カウンセラー研修

一人ひとりを大切にする 教育相談

カウンセラー研修員 万徳 昇¹⁾

I 主題設定の理由

1. 教育相談に求められるもの

平成10年7月下旬の新聞報道によると、神奈川県内の公立・私立の小・中学校で30日以上長期欠席者数は小学校5,808人、中学校8,518人で、前年度よりもそれぞれ127人、834人増えている。

その中で「学校嫌い」は小学校1,156人、中学校4,875人となっており、中学校では1学級当たりそれぞれ0.75人、1校当たり10人に上っているという驚くべき数字であった。

そして、12月には文部省から問題行動調査が発表され、神奈川県内では「暴力行為」3,162件、「器物損壊」1,014件、「いじめ」3,396件など、他の都道府県と比較してみるといずれもワースト6に入ってしまう結果となってしまった。また、この間にも全国的な傾向として小学校での「学級崩壊」「授業不能」などの報告がされた。

このような背景から、文部省では全国8,000校に対し「心の教室相談員」を配置するなどの対応が行われた。

現在の小・中学生にはどのような子どもが増えているのだろうか。いろいろな調査や現象から次のようなことが言われている。

- ・ささいなことでキレる子ども達。
- ・人間関係の希薄さから自己表現をすることができない子ども達。
- ・何事にも我慢することができない子ども達。等

多くの悩みを抱えたままその解消するすべを知らず、ゆとりのない生活を送っている子ども達にとって、今何が必要なのだろうか。

当総合教育センターのカウンセラー研修員として、教育相談の研修の機会を持たせていただいた今、自分自身を振り返りながら、このような子ども達に対してどのようなことが必要なのかを考えてみたい。

2. カウンセリングのころとは

日々の教育活動の中で子ども達一人ひとりを理解し、よりよい人間関係を作り上げていくためにはどのようなことが求められているのかを考えてみると、まず

- ・子どもの立場に立って、見たり、考えたり、感じた

りできる「共感的理解」を大切にする。

- ・相手があるがままに受け入れ尊重する「暖かさ」を大切にする。
- ・子どもに自分のところを開き、正直に向き合う「純粋さ」を大切にする。

以上のようなことを大切にしながら子ども達と接していくことによって、よりよい人間関係を作りあげていくことが重要な要素となると思う。

しかし、学校ではどうだろうか。私達教員は様々な会議や部活動、学級の事務処理等で時間的な余裕があまりない。また、教科指導の中でも多くの子ども達を相手にし、一人ひとりの学習の理解度を確認する時間もなく、子ども達一人ひとりとゆっくりと落ち着いた雰囲気の中で話をする機会があまりにも少ないように思える。

このような現状の中において、私達が子ども達とのかかわりをどのように持つことが大切なのか、「教育相談」のあり方について学び、自分自身を振り返る機会としていきたいと考え、主題を

一人ひとりを大切にする教育相談
～カウンセリングのころとは～

とし、研究に取り組むことにした。

3. 研究の方法

- (1) 受理会議に参加し、来談者がどのような問題(主訴)で悩んでおり、それに対してどのような援助が可能であるかについて多方面から考え、その方向性をどう捉えるかについて学ぶ。
- (2) 事例会議に参加し、報告された事例をもとに様々な視点から検討し、スーパーバイザーからの助言を受け、今後の治療の方向性をどう見いだしていくかについて学ぶ。
- (3) 教育相談初級研修及び教育相談実習研修コースに参加し、教育相談の基本的な考え方や態度について理解を深めると同時に、実習を通して子ども達一人ひとりへの援助や理解をどう深めていくかについて学ぶ。
- (4) 文献や資料を通して、教育相談やカウンセリングについての知識や理解を深め、研究の一助とする。

II 研究の内容

1. 受理会議及び事例会議を通して

毎週行われている受理会議に参加し感じたことは、考えていた以上に相談の申し込みや継続相談件数の多いこと、そしてインテーク時の報告をもとにこれから相談

¹⁾川崎市立王禅寺中学校(カウンセラー研修員)

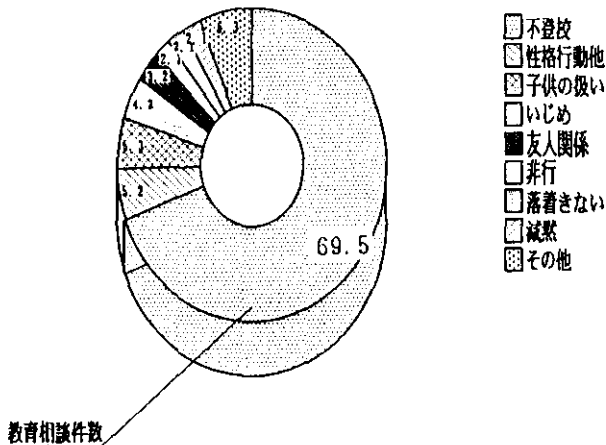
を進めていくにあたって、できる限りの情報を集め、その主訴を解決していく方向性を検討していく姿勢であった。

来談者一人ひとりに対して相手の気持ちを丸ごと理解しようとする姿勢を持ち、問題の解決に向けてその人の成長力・治癒力を信頼してかかわっていくことを大切にしていると感じた。

それに比べて私が学校で行なっている教育相談はどうだっただろうか。日々の活動の中から、その子どもの行動や言動、表情や服装、友人関係などについて、その意味を考えたことがあっただろうか。子ども達の行動の背景にあるもの的一端でも掴んでいただろうか。現象だけにとらわれ、その指導・示唆だけに終わってはいなかっただろうか。

当教育相談センターの4月～12月末現在までの新規相談内容を主訴別に見ると「不登校」が69.5%を占めている。(図1参照)

図1 新規教育相談件数(4～12月)%



「不登校」となった原因を特定することは大変難しいことであると思う。しかし、その訴えの中には「担任の先生とうまくいかなかった」「担任が子どもを理解してくれていなかった」などの声があった。

具体的にどのようなことがあったかを知ることはできないが、一人の子どもの心が傷つき「不登校」という状態になってしまったことは確かである。

私はその子どもの気持ちを少しでも理解するためにも常に子ども達と同じ高さの“目”を持つことの大切さを考えさせられた。

事例会議では、スーパーバイザーが事例の内容を的確に捉え指摘していく視点は、大変学ぶべきものがあった。

2. 教育相談研修コース及び文献や資料を通して

教育相談研修コースには初級及び実習コースが開設されており、教育相談の基本的な考え方、グループワーク

トレーニング、ミニカウンセリング、箱庭、ロールプレイング等について学ぶことができた。

今回の1年間の研修は、これまで私が行なってきた教育相談が、子どもの話を聴くことよりも一方的な指導・示唆またはアドバイスする場としてしまうことが多かったことについて見直す良い機会となった。

その例としてミニカウンセリングの実習があげられる。この研修を通して感じたことは、傾聴の大切さ、受容することのできる“心の広さ”、共感的理解が深められる“思いやり”、言語だけでなく非言語によるコミュニケーション、待つことの大切さであった。特に沈黙の中に秘められているものは決して無ではなく、なんらかの思いがその中に含まれていると同時に葛藤があることを知ることができた。

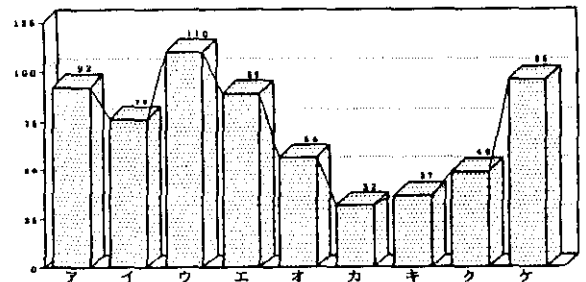
さらにグループワークトレーニングは実際に学校で学級指導の時間に実施することができた。学級の子も達は最初、「何故こんなことするのか」「くだらないよ」などと言っていたが、活動後の振り返りシートの感想の中で「みんなで協力できてよかった」「できたときはとても嬉しかった」と述べていた。子ども達はグループ活動の中で自分自身を理解し、他の人とのようなかわりをもつことができたか、自分がどのような役割を果たすことができたかなど、子ども達が相互に認め合うよい機会となった。

以上のことを通して私は、子ども達の成長力を信じ、かかわっていくことが大切であることを改めて学ぶことができた。

ところで以前、生徒一人ひとりを大切にするために子ども達が今何を考えているのかを把握する方法の一つとして、O中学校で「生徒の意識調査」を行なった。

その中の、【学校で楽しくないことは何】の問いの回答として上位を占めたものは「先生に叱られたり、嫌みを言われること」「友人関係がうまくいかないこと」「授業がわからないこと」であった。(表1参照)

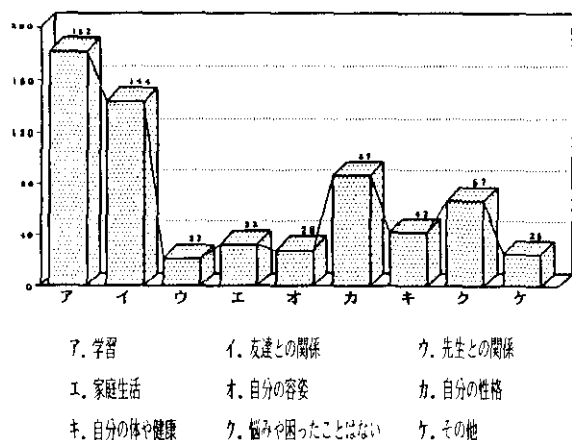
表1 【学校で楽しくないことは何】



- ア. 友人関係がうまくいかないこと
- イ. 嫌んでいる生徒がいること
- ウ. 先生に叱られたり嫌みを言われること
- エ. 授業がわからないこと
- オ. 清掃活動すること
- カ. 体育祭や文化祭の行事
- キ. 係や委員会の活動
- ク. 先輩や後輩との関係
- ケ. 特につい

また、【一番悩んだり困ったことは】の問いの回答として、上位を占めていたのは「学習」「友達との関係」「自分の性格」であった。（表2参照）²¹

表2 【一番悩んだり困ったことは】



以上の結果から、子ども達は「子ども達と教師との人間関係」「子ども達同士の人間関係」そして「学習」についての葛藤が学校生活の中で大きなものであることがわかる。

学校という集団生活の場において、子ども達の生活から人間関係の問題を抜きにして考えることはできない。そこにはいろいろな人と人との関係から生ずる多くの悩みと不適応が起こっている。

さて、学習の面から考えてみると、現在話題を呼んでいる学級崩壊の要因の一つとしてあげられているものに「勉強がつまらない」「勉強がわからない」という子ども達の声がある。

「学習」に対して悩み、困っている子ども達への学習指導のあり方についても子ども達が今何を求めているのか、何を知りたいのかを知り、理解するとともに自ら学び自ら考える力を育成することが大切である。

Ⅲ 研究の成果と今後の課題

一年間の研修を通して教育相談に関する会議や事例会議に参加するとともにそれにかかわるいろいろな研修を深めていく中で、私自身がどのように子ども達とかわかっていくことが大切なのか、「一人ひとりを大切にする教育相談」のためには、どのような“カウンセリングのこころ”を持たなければならないかを確認することができた。

- ・現象だけにとらわれず、子ども達の行動や言動の背景にあるものを理解する。
- ・共感的理解を持って「傾聴」し「受容」できる「こころの暖かさ」を大切にする。
- ・言語だけでなく非言語によるコミュニケーションを

大切にする。

- ・物事に性急にならず“待つこと”ができる“こころのゆとり”を大切にする。
- ・子ども達の自己成長力を信頼し、グループ活動等を通して子ども達が相互に認め合う機会が持てるように援助する。
- ・子ども達にこころを開き、「純粋に向き合う」ことを大切にする。

自分自身が今までどのような姿勢で子ども達とかわかりを持っていたのかを振り返って見ると、指導や示唆するという一方的なかかわりで終わってしまっていたことが多く、子ども達と同じステージに立って物事を考えたり、一人ひとりがどのような想いを持っているのかを理解しようとするのが少なかったように思われる。

ところで普段の学校生活の中でよく聞かれることとして「教育相談は大切だとは思いますが、時間的な余裕がないからできない」「特に問題がないのだから必要ない」などがあげられる。

果たしてそこには子ども達と教員のよい人間関係が成立しているのだろうか。教員の一方的な判断や価値観だけで子ども達を見ていないだろうか。改めて教育相談の時間にと考えずに、休み時間や昼食時、そして部活動までのちょっとした時間を有効に使えることを私は忘れてはいけないと思う。

日々の生活の中で、暖かく子ども達の成長を見守り、信頼し、共感し合えるような“こころのふれあい”を大切にしたい人間関係を作り上げるために、今後とも努力することを課題としたい。

おわりに

カウンセラー研修員として、一年間多くの研修の機会を与えていただき学んだことを、今後の教育活動の中に生かして行きたいと思えます。

最後になりましたが、ご指導いただきました室長・指導主事・相談員の皆様にご心からお礼申し上げます。

・参考文献

- 松原 達哉 「学校教育相談」
日本文化科学社 1978年
- 前田 重治 「カウンセリング入門」
有斐閣選書 1986年
- 武田 建 「カウンセラー入門」
誠信書房 1988年

・指導助言

川崎市総合教育センター研修指導主事 鈴木 眞一

学級担任が行う教育相談

星野 泰夫¹

I 主題設定の理由

1. 研究をするにあたって

私自身を含めて、学校の教員は生徒指導上の問題に対応する際、結果を急ぐ傾向が強いようである。そして問題を持つ生徒の動向に日々一喜一憂を繰り返す。もちろん緊急時に事態の好転という結果を急がざるをえない場合もある。そんなときに限って対応は慌ただしいものとなり、事態の好転はおろか、教員の対応が空転してしまうようなことも得てして多いのではなかろうか。援助であるはずの指導が、かえって事態をこじらせてしまうような場合も少なくないと思う。それは問題自体がどのような類のものであっても、あてはまることである。さらに、事後に教員はその事例をじっくり振り返る機会に恵まれない。もちろん個人レベルや校内事例研究などがあっても、すべての事例に対して、事にあたった教員全員がじっくり時間をかけて意見交換をするような機会という意味においてである。教員にはその他の生徒指導上の課題はもちろん、教科研究、期限の限られた事務処理、諸会議、校外への出張、放課後の部活動の指導等が目の前に山積みされ、時間的なゆとりが少ないのである。だからといって、結果を急ぐ指導がやむを得ないということにはならない。

しかし一方で教員は、経験にもとづいて問題行動の予測をし、その防止に努めることにはかなりの時間と労力を費やしている。例えば体育祭などの学校行事の推進や生徒会活動への援助指導など、特別活動の一側面を有効に生徒指導に活用することなどはそれに該当するであろう。そうしたことによって一昔前から現在も各学校現場では相応の成果をあげていることは紛れもない事実であろう。ところがそうした教員の働きかけは主に生徒集団を対象とした場合が多い。しかし、生徒集団への働きかけで成果がみられる一方で、生徒個々が持つ問題のすべてが解消されるわけではなく、教員は生徒指導上の課題に日々頭を抱え続けている。

教育行政の施策により、スクールカウンセラーが試験的に配置された。さらに、今年度の途中に〈心の教室〉が全国の中学校に設置された。

こうしたことは、今や学校現場に対して、教員が現在行っている以上の生徒個々の心への関わりを社会が求めていることの顕れであろう。

さて、それでは教育相談は前述した課題に対する万能

薬なのであろうか。少なくとも即効性を求めることは難しいであろう。しかし、教育相談の根本にある生徒理解の考え方や姿勢が生徒の抱える問題の早期発見や早期解決に役立つ可能性が少しでもあるのなら、教員が教育相談への理解を深める必要がある。

現在の学校教育では担任の役割が重要視される。もちろん各学校においては、担任を孤立させないような教員相互の連携も不可欠な態勢であるが、生徒との日常の学校生活における自然発生的な接触の機会の頻度だけを考えても圧倒的に担任と学級生徒との場合が多いことは言うまでもない。

本研究では学校において、特に生徒との関わりが深くあるべきことを望まれる担任と学級生徒との関わり方を中心とした教育相談について考察し、その望ましい方向性について考えるとともに自分自身の教育相談に関する考えを整理してみた。

2. 研究の方法

- (1) 総合教育センター教育相談室受理会議及び事例会議に参加し、面接の際の相談者に対する多角的な見方や技法・進め方・問題解決へ向けての考え方を学ぶ。
- (2) 総合教育センター教育相談諸講座に参加し、相談の意義や技法を学ぶ。
- (3) 関係文献や資料を通して、相談の意義や技法を学ぶ。

II 研究の内容

1. 受理会議・事例会議を通して

諸会議への参加により、特に感じたことは報告の中での相談者の発する表情・眼差し・声音・服装などの非言語表現に対する面接者の洞察の深さであり、それに対する会議参加者の多角的な考察である。学校現場でも、日常場面で生徒が発する言語及び非言語による様々な表現を教員が見逃さないようにという意味で「アンテナを拡げて」という言い回しを用いて表すことが多い。しかし実際にはそれは生徒集団の中でのほんの微かなシグナルであり、すべてを網羅することは不可能であろう。当相談センターでは自主来談、1対1の面接が原則であって、いちがいに学校での教育相談との比較は難しいが、相談面接の基本姿勢の一つとして大いに学ぶべきところであろう。

また、相談者の訴えの中に教員がたびたび登場する。しかし、その多くは児童・生徒や保護者から、良い心証をもたれてはいない。それは、教員が善処しているつもりでの対応が、実際には児童生徒や保護者の求めていることとの理解が不十分のまま行われているため、相互の信頼

¹ 川崎市立京町中学校（カウンセラー研修）

関係が壊れた結果であるように感じた。そうしたことが自分自身を含めた教員のまわりに日常的に起こっていることに気づいたことは、本研修での大きな収穫であると感じている。

さらに1件の相談に対し費やす労力や時間は通常の学校現場では考えにくいことである。もし学校現場でこれに近い状態をつくるのであれば、教育課程や教員の人員等々に関する、教育行政の抜本的な環境整備が欠かせない条件となるであろう。

2. 諸講座・関係文献を通して

本研修より以前に、多くの研修や文献を通して、生徒と接する際の傾聴姿勢、いわゆるカウンセリング・マインドをもった接し方の重要性を繰り返し見聞きしてきた。私自身不勉強のため、字面で「傾聴」という意味を理解していた。しかし、あいづち・くりかえし・感情の明確化・言い換え・要約・沈黙または開かれた質問というような話の「事柄」でなく、話し手の「感情」の部分に焦点をあてるための基本的な技法の実践方法を再確認できただけでも喜ばしいことであった。また専門的な訓練を受けられればそれにこしたことはないが、こうした基本技法の多くは少し意識すれば、日常生活の会話の中でも訓練をつむことができそうである。

また、グループワークトレーニングはゲーム感覚で参加できる点、さらに活動的である点を考えても児童・生徒に馴染みやすいものであると感じた。教員の実施意図がリーダー養成であっても、人間関係の学習であっても、教育課程内の特別活動において学級内等の小集団に対して実施することについては非常に興味深いものである。教員がきちんと理論や手法を理解し、計画性と継続性をもって段階的に実施することができれば、大きな効果が期待できるものであると思う。

3. 学校では

学校で相談面接を行う際に、担任と学級生徒との間で実施されることがもっとも多い。しかし、面接者である担任教師がカウンセリングの専門家であることは極めて稀なことである。生徒が自ら望んだ面接でない限りは教員主導もしくは雑談のようなものになることが多いのではなかろうか。しかし、雑談をかわせる間柄というのは微妙に親密な関係であると思う。だからその都度、教員が傾聴姿勢を心がけて臨むことにより、その積み重ねが担任と学級生徒との関係を深め、よりよく発展させることになる。どうしても教育相談＝相談面接＝カウンセリング＝専門的＝難しい、と考えがちである。よく言われることだが、その形式が面接というあらたまったものでなくとも、教科授業内を含めた学校生活全般でのちょっ

とした生徒との接触を通して、生徒との関係を深める機会をもつことは可能であり、学校においてはより自然なものである。教員側から積極的に機会を作り出せるという点においては専門機関よりも恵まれていると、とらえた方がより前向きな取り組みとなる。こうした教員の日々の生徒への働きかけが問題行動の予防や生徒自身の成長や自己開発への援助に役立つのではないか。時に厳しい指導が必要な場合にも、その指導効果を高めるはずである。現在の学級担任制というシステム上、こうした予防や開発的な教育相談は、担任の関わりが深まれば深まるほど、その他の教員の働きかけが生徒にとって有効に作用してくるのではなかろうか。また、こうした予防や開発的な教育相談が、相談の専門家としての知識や技術の不足した担任がもっとも取り組みやすく、そしてもっとも望まれるものであろう。

担任を中心とした教員の日々の努力も空しく生徒の持つ問題がエスカレートし、学校への不適応行動が顕著になることが予想されたり、もしくは担任として受け持つ以前にそうした状態におちいっているケースもある。生徒本人はもちろんであるが、むしろ保護者との対応も多くなり、また関係を深めていく必要がある。

もちろん可能な範囲で関わろうとする努力を継続することは大前提である。しかし、担任だけで抱え込まずに他の教員との連携を図ることと同様に、学校だけで抱え込まずに生徒の状態にみあった外部の専門機関との連携を検討し、判断し、必要に応じて生徒や保護者に紹介することも教員の役割になるかもしれない。このときに生徒本人や保護者が「無理やり行かされる。」「学校に見放される。」等の不安や不満を持たないように配慮が必要であろう。現在、中学校では校長、教頭や生徒指導担当、場合によっては養護教諭は外部機関に関する知識を得る機会が多いが、それ以外の教員も外部機関に関する知識を身につけておくことは必要であり、可能である。その際、問題の性質上どの機関がもっとも適切であるかの見極めも肝心になるであろう。

さて仮に、生徒や保護者が専門機関に足を向けることになったとしても、機関によってはその性質上、そこの対応についての情報が入りにくくなることも考えられる。熱心な教員であればあるほど、情報を得られないことについて不安や不満をつのらせることもあるようだ。専門機関では知識と技術をもった専門家が、主に治療的な分野の対応をしているのである。だからある意味で教員が「餅は餅屋に……」という気持ちをもつことも必要ではなかろうか。

また総合教育センターでも相談者の理解があれば、学校での具体的な対応について、教員と相談員との間で検討会をもつという事例もあるようだ。そうしたことがで

きるかどうかは、相談者・相談員・教員の三者が良好な関係を築けているかに左右されるのではなからうか。なんらかの形で情報交換ができたとしても、得た情報の扱いによっては、教員はもちろんその外部機関の信用を損なうことになりかねないことに十二分に配慮しなければならない。学校の紹介でなく、生徒や保護者が自発的に外部機関を利用した場合はなおのことである。

学校に不応で、かつ外部機関との接点も見いだせない場合もある。こうなると教員自身が無理をせず継続できる方法を見だし、根気よく生徒や保護者との関係を深めようと努力する以外に、なにか良い方法があれば是非知りたいと考える。

例外はあろうが、いずれにしても生徒の抱える問題が大きければ大きいほど、その生徒は教員の関わり方を観察し、また期待していることを私たち教員は経験的に知り得ているはずである。

Ⅲ 研究のまとめと今後の課題

教育相談は人間と人間との間に成り立つ関係である。文章表現はひじょうに難しいのだが、教員のひとりの人間としての資質、素養、感性といった客観的判断基準の不明瞭な、そういったものが重要な要素をしめる気がする。とくに教員と生徒との間のことであれば、そこには日常の教員のふるまいが多大な影響を及ぼすことは間違いないことなのである。私自身、そういったものがどの程度身につけているのか甚だ疑問である。少々大げさになるが、良き相談者としての教員には教育相談の知識や技能の他に豊かな人間性が必要になるのだろう。しかし、それは急激に高まるものでなく、努力をしたから身につくというものでもなからう。しかし、教育相談の知識や技術を含めた考え方は、その不足している部分を少しでも補うためのひじょうに有効な手段のひとつであると、私は感じている。さらに、それをもって実践していくことが教員にとって、さらにその教員と関わる生徒にとって、とても大切なことではなからうか。

また教育相談は1対1の関係であり、傾聴し、受容し、共感することから始まる。それによって生徒をより深く理解できるようになる。しかし、学校で教員が関わろうとする生徒はひとりではない。一人ひとりの生徒が私たち教員と出会うまでの生育歴や経験によって、教員を受け入れる態勢や受け入れるまでに要する時間に差が生じるのは当然であろう。生育歴や経験を知り得ればそれにこしたことはないであろうが、それは一朝一夕でできることではないだろう。教員にとって重要なのは、生徒一人ひとりに、そうしたことによって生じるちがいがあるといふことを知っていることだと思ふ。中学校であれ

ば、3年間という時間が限られているし、担任と学級生徒であれば1年間が1単位時間となる。この時間が長いのか短いのかはわからない。しかし、その限られた時間の中でより多くの生徒とより良い関わりを持つためにも、教育相談の知識や技術をより多く身につけ、実践していくことは欠かせないものであると思う。

私たち教員は、生徒や保護者の良き相談者でありたいと願っている。ところが現実には、生徒や保護者からそうは受け止められないこともあるようである。教員の職務は相談だけではなく多種多様である。そのような中で教員は精神的にも時間的にもゆとりが持ちづらいように感じている。さらに各現場の施設設備を含めた諸条件を考えると、とても充足されているとは言い難い状態ではなからうか。しかし、より良い相談者でありたいと願うのであれば、基礎知識や技術の習得を心がけ、さらに日々目の前にいる生徒と共に実践を重ねる必要があろう。

おわりに

中学校の教師として10年余、生徒指導担当として4年目の今年、教育相談について学び、じっくり考えを整理する1年間となったと思っています。また本研修中に学んだことを実践し、より多くのことを消化・吸収できるようにと考えております。本研修に際し、ご指導ならびにご助言いただいた総合教育センターの方々及び勤務校の校長先生をはじめ同僚の皆様感謝いたします。

・参考文献

- 国分 康孝著 「カウンセリング・マインド」
誠信書房 1981年
- 菅野 純著
「教師のためのカウンセリング・ゼミナール」
実務教育出版 1995年
- 青野 勇著 「取り組もう学校教育相談」
教文研双社 1998年
- 小谷 英文編 「ガイダンスとカウンセリング」
北樹出版 1993年
- 全国教育研究所連盟編
「だれもが身につけたい生徒指導・教育相談」
ぎょうせい 1992年

・指導助言

- 川崎市総合教育センター研修指導主事 鈴木 眞一